

あきらめないこと



さか もと あつ し*
阪 本 敦 志*

取得した資格：技術士（総合技術監理部門、上下水道部門）
資格取得年度：令和4年度（総合技術監理部門）、令和3年度（上下水道部門）

受験の動機・経緯

私は大学院修了後、建設コンサルタントに就職し、農業土木、宅地造成、公園整備、下水道及び道路の設計を経験した後、現在の職場となる高槻市に民間経験者採用枠で奉職しました。技術士の資格を取得したいと思ったのは、建設コンサルタント時代の直属の上司が技術士であり、発注者に対して重みのある説明をされる姿に感銘を受けたことや、土木に携わる者として技術士はどこでも一目置かれるという、いわば唯一無二の資格というイメージを持っていたため、若手の頃からずっと挑戦し続けていました。30代前半は、建設部門で受験してきましたが、すべて筆記試験で不合格となり、試行錯誤を続けていたことを覚えています。

高槻市では配属が水道部であったため、ターゲットを上下水道部門に切り替え、30代後半から同部門を受験してきました。毎年受験するにつれ、出題者が求めている回答を徐々に理解できるようになり、合格できた年は出題内容と勉強していた内容が合致しており、試験の手ごたえを感じた年でもありました。

本稿では、総合技術監理部門の対策について私が実践した勉強方法をお伝えしたいと思います。

出願対策

皆様もご存じのとおり、技術士第二次試験は口頭試験を見据え、出願時に提出する業務経歴や業務内容の詳細について十分に対策をとる必要があります。

業務経歴の作成では、自分が経験した業務において、総合技術監理部門の5管理（経済性管理、人的資源管理、情報管理、安全管理、社会環境管理）をどのように扱ったのか、5管理のトレードオフや課題はどのようなものがあったのか、また、それらをどのように調整したのかを意識して記述しました。

業務経歴の整理方法としては、過去に経験した業務を時系列に挙げ、その業務について5管理の内容を書き出し、関連する各管理間のトレードオフの内容を書き出しました。

次に、業務内容の詳細の作成では、上記の業務経歴の中から、最も総合技術監理部門にふさわしい業務を選択する必要があります。

記述内容の主な項目としては、【課題】として各管理間のトレードオフが挙げられているか、【解決策】としてトレードオフに対する調整が図られているか、また、【成果】として業務の目標が達成されているか、といったことがポイントとなると思います。

択一試験対策

私が総合技術監理部門の試験勉強で最も苦勞したことは、この択一試験でした。土木技術者にとって、最も馴染みがないのは経済性管理の設問ではないでしょうか。過去問を解いたときに、苦勞したことが経済性管理の専門用語で、これがどういう意味なのか、まずはそこから調べ始めました。文部科学省から出されるキーワード集から自分が知らない用語に

*高槻市 水道部 管路整備課長

ついてインターネットで調べ、オリジナルの用語解説集を作成し、繰り返し確認することで記憶の定着化を図りました。あと、最近トレンドとなった科学技術に関わるキーワードについても正確にその内容を把握するよう心掛けました。その甲斐あってか、択一試験では合格ラインとなる60%以上正答することができました。日々の努力の積み重ねは結果に表れます。毎日少しずつでも折に触れて確認することが重要であると思います。

筆記試験対策

筆記試験の問題文は、設問に至るまでに前文が記載されています。この前文は我が国が抱える問題、課題等が記載されており、その情報から問題文のテーマを抽出することができます。そのテーマに対して、自分が経験した業務と絡めて、総監的な視点から、どのような計画を立て、どのような方策をとるのか、また、新たな事業を実施するに当たり、組織体制や事業内容をどのようにするのが問われます。

これらの問いに対しては、一朝一夕の経験や勉強だけでは到底解答することができません。私の場合、仕事をする中で我が国の取り巻く環境や科学技術の最新の知見について、常にアンテナを張り、情報収集し、総監的な考えをまとめ、文字化することを心掛けました。

口頭試験対策

口頭試験は、筆記試験の合格発表から2か月ほど時間があつたので、まずは口頭試験で試問されるもとなる業務経歴及び業務内容の詳細を改めて確認し、これに関連する質問をでき得る限り挙げ、想定問答を作成しました。

面接慣れしていない私にとっては実際に声に出して回答する練習も必要と感じ、自宅の部屋を口頭試験会場に見立て、妻に面接官役になってもらい、想定問答からランダムに質問してもらいました。実際、頭で考えていても、発声すると早く話してしまったり、息継ぎもままならないこともあり、相手にうま

く伝わらないことがあります。本番では初対面の面接官に対し、自分の考えをわかりやすく的確に伝えるのは相当慣れしている方を除いてほとんどの方は緊張してうまく話せないと思いますので、一度実際に声に出して回答する練習をすることをお勧めします。

受験者へのアドバイス、注意点、励まし等

冒頭で記述しましたが、私の技術士第二次試験の挑戦期間は30歳代からなので、10年以上も受験し続けたこととなります。皆様にお伝えしたいのは、技術士の資格を取得するにはあきらめず挑戦し続けること、そして受験される部門に関係する業務に携わることがあれば、常に試験に応用できるか意識して業務に取り組むことが大切だと思います。また、皆様が携わる業務に真剣に向き合い、自己の技術を研鑽し続けることも重要であると思います。これを実践し続ければ、必ず合格を勝ち取ることができるはずです。

最後に、技術士の資格を取得しても、私も含めて皆様の技術者人生が終わるわけではありません。技術士となっても従事される業務を通じて、よりよい社会とするために共に自己研鑽していきましょう。

【著者紹介】 阪本 敦志（さかもと あつし）

建設コンサルタント勤務を経て平成19年に高槻市入庁。水道部お客様サービス課を経て、令和4年度より現職。